



嵐峽卷月琴譚

後篇

貳

967
71
13
符



遠門
號 967
卷 7

本清



嵐峽花月奇譚卷之七〇

平安 頼川恒成著

第七回

花姫春と想て爵旁と病ふ
侍女神と禱て瑞占と得る



且説大西則春が秋藏娘は桜子の去年の八月北野
の下の木林に桂太良は不意邂逅する。日頃の想ひ
と諦めとつゝも篤実桂太良道理をのりて言を
め。時節をまてとて戯まると心のさふさふりしり
夫は激まされ且愧る。さうきて後の弥増も恋して

花月奇譚卷之七〇
一
窪文堂藏

まさる憂おのひ。思ふ良人の勸気とらけて。行術ま
しきにありし。聞けはさくむと胸くさしく。遂は気鬱
此疾病と祭。深窓は引こめり。人は對するや厭
ひ。食事もさくまざりられ。日こ小羸瘦して。花のりね
むを柳の眉。それさへ甚く面やせく。乱まゝかるくろ
髪。雨はぬまゝる海棠は蜘蛛の巣とけり。ごらく。
操女の杖も柱も。棄しとこのむ瞿麦花の。一人の兒
女が又も世よ。おと人れ数ふし。何と憑ふおあまが
やく藻し。およりおは鹹をせよ。活存命ん奈何あも

し。本復させんと鬼神は願を。医師よこのにて針灸
茶餌。加持祈禱する。まご心れり。と竭せども。恋
此病は。いさくよ。既は危殆。及び。母の。お
し。おのひ。侍女阿哥と膝下ら。の。召よ。て潜
よ。い。お。女兒。女度。病。物。おのひ。あ。光景。
親は。口より。斯。最。い。外。世。繼。の
子。と。い。お。花。中。も。月。中。も。一。人。の。娘。も。命。は。行。心。ち
有。て。良。人。れ。家。督。と。繼。と。れ。あ。く。遂。は。家。断。絶。せ。ん。
かくて。先。立。死。の。い。良。人。へ。何。と。も。言。わ。け。な。され。ん



操女阿奇
 櫻子
 病因
 訪ふ

操女



断金み友ありしや。兒女ホ幼稚りしころ成長まひ
我嫁はくまよくまんと許嫁言ひ約束ししれども。
変了安き人しんしんへねい秋月どか家隸が喧嘩の
尻持る無二らざりて交りその其中らしと願比傍若
無人我良人罵辱しゆる飯らましが。尔後我
郎へ足さへ入らばまそ安方もろとんばよし
遂に絶果より尔まどと娘と桂太良が縁断も断ぬ
も其更沢の立ざりしを良人ハすでお世とさうりし。
奴家家督とわづくれども女れ身もまが耻もろ一信言

しと和睦して清澄に嫁しし思へど現在我良人ハ
清英どの不礼と怒るわどあく死去りゆれども
灵魂彼人とわくさやま疑ひおろしん。さすれが親
親同士敵同士も同然るふ其子供ホが安閑し。夫
婦もあつらふらん。然まど子供ホ二人が中へ絶交
せざら昔より約し置まししおまが赦免ししあり
まねいも。奈何ある事此答るや。これ桂太良の去年
此秋より勘當せしれり行滞さへしまべとさけが為
あし。頼むい汝ホよま中ふ言慰めく娘が病乃速く

愈るすふしね。奈何ある。況ふきねども。秋月の、か
 ひらり見うと外の家名を継とれども。桂太良子も
 生質の衆よ勝まき。伶俐けきも。放蕩行状ゆくと
 づるもそらねば。是もまきと別と。況ゆる。更あふへ。斯有
 べつらまき。勤當に赦免さるも。有まどく。又城方と
 不和とありしも。このうと野心ゆるよ。あつ。只うあつ
 よう。憤ア。中と違ひまひ。すれ。是もまき。熟
 考へる。自然恨も。とけて。和睦する。あつ。あつ。ん
 や。浪風も。あつ。和平ふ。主候へ。ね。い。て。彼。桂太

良と更々。婚姻させ。夫婦とせん。病う。し。て。従
 2。可惜一命と失ふ。おりの願ひも。迷らまじ。さ。一人
 あり。妹母も。甚く憂目と。ま。あ。あ。貞女も。立。は
 孝行の道。と。ら。ま。お。癡て。あ。ん。是。ホ。れ。美。理。と。弁。へ。よ
 と。娘。が。心。と。あ。つ。あ。つ。又。激。ま。ま。呉。よ。う。し。跡。得
 言。び。子。を。お。の。心。に。聞。は。胸。を。ら。目。り。ふ。痺。む。ま。ま。ま
 と。背。面。も。あ。り。ま。押。ぬ。ひ。屢。酸。鼻。ね。心。と。察。し。侍。女
 哥。女。後。室。に。背。撫。摩。ま。て。娘。に。あ。ん。心。の。奴。家。等。ら
 よ。ま。あ。ふ。言。ひ。ま。侍。ら。ふ。ん。大。く。も。あ。り。い。わ。ん。ら。い

多ひてこそ小病着しよ。まじく奥の一間にて。きつて
休息しあへり。慄慄し。後室に手とり一室へ
入らる。かくて哥女の櫻子が居間を往々後室のく
まし。遺りて。憚まば。櫻子枕をり。けり。母乃
慈恵に有がごとく。感し。と泣くも。赦免さる。母乃
母上さゆ。よ。思ひ屈し。ゆ。ね思ひ。ゆ
な。不孝の奴家と破落戸と。山外に。去。却。二
隣ま。あ。嚴父の。在。時。も。睦ト
く。中。と。睦。あ。彼。と。娶。と。宣。

とや。そ。有。真。病。煩。何。奈。何。ふ。
斯。有。命。と。聞。去。長。病。苦。甚。く
瘦。髭。明。日。さ。ぬ。奴。家。命。心。づ。水。と
あ。ん。十。七。歳。の。春。秋。と。挿。の。花。と。愛。つ。く。盛。
立。御。思。ね。須。弥。大。海。も。比。べ。く。然。る。と
一。点。報。ひ。も。得。先。立。死。ね。不。孝。の。罪。科。
空。恐。く。勿。躰。あ。只。上。情。愼。死。あ。と
ま。秋。月。の。家。と。和。睦。し。て。よ。我。良。人。桂
太。良。ぬ。勤。気。も。赦。還。思。ひ。櫻。

先立死て蓮葉に半坐坐し待間ふ。未来に
 契と必る。たぐり多んで二世三世。女夫と成る。由
 言つて人々を侍女ども。痛くは慈母と
 ぶつて清澄ぬ。今の何国は身とよして。奈何
 多くはしむひぬらん。逢ふや見ふやと。くは口流嘆く
 心どめいさふる。かゝる時にも侍女胡蝶管相公乃御
 守護符。恭しく捧げ持し。表れ方より人々来つ。
 桜子が枕辺に両手をつき尋常。胡蝶が目今飯
 了とべも。今日のおん心持。いふふとせむふとや。管聖

廟のお千度も。稍く今日が満願。御守護札を
 いふと飯まり。是と載さぬひふが。おん病着も速
 愈す。且ま。昔相公も我ホが願ひ。御納受有
 一驗。前日御門の傍。氷人石は張帛して。
 彼方るに在り処と。あしめ多くと昏ておと。尔後日
 まの度ごと。のぞきまれども。今日まで。其甲斐文
 小ふりし。氷人石とい名の。腋立し思ひ
 居し。今日し。これこれ此通。嵐山にふ
 ごと。昏つてをべ。全く管相公神霊に。御利生

よて侍らばやまゝと圖ととりもくもふ。心ごよ信と道
 り。ふひあをいのつべととも。神やまのしん。とりふり
 く。れ出るる。適目出た。瑞相あり。斯頼母。一と
 御告あふ。傳く思ひ屈。一と。愚痴よまべり。櫻
 子とぬ。脚心。一と。ふ持多ひ。茶汁も上。食飲も。
 勉強。食上。一と。日あま。空も。長閑。あり。
 花。頃。一と。と。棄。一と。名。一と。あ。の
 の山。花見。一と。往。茶舟。一と。遊。一と。入。の
 一と。あ。一と。此頃。一と。人。一と。

日くま。桂。一と。あ。月。一と。花。一と。大井。一と。は。の。一と。舟
 花も。鬼。一と。程。一と。桂樹。一と。里。一と。由。一と。縁。一と。あ。秋。一と。月。一と。大。一と。人
 一と。逢。一と。娘。一と。勿。一と。論。一と。奴。一と。家。一と。ホ。一と。ま。一と。ふ。一と。ん。一と。ぢ。一と。う。一と。ま。一と。し。一と。う
 侍。一と。ら。一と。ん。一と。言。一と。辞。一と。丹。一と。心。一と。り。一と。い。一と。い。一と。い。一と。言。一と。あ。一と。ぐ。一と。ま。一と。し。一と。ま。一と。が。一と。櫻
 子。一と。も。一と。涙。一と。ぬ。一と。く。一と。ふ。一と。て。一と。や。一と。よ。一と。胡。一と。蝶。一と。毎。一と。日。一と。一と。れ。一と。千。一と。度。一と。ま。一と。つ。一と。り。一と。大
 美。一と。で。一と。り。一と。し。一と。さ。一と。ど。一と。芳。一と。き。一と。ん。一と。次。一と。ま。一と。ま。一と。ま。一と。一と。休。一と。息。一と。し。一と。ぬ。
 是。一と。が。一と。守。一と。懐。一と。前。一と。あ。一と。る。一と。明。一と。日。一と。の。一と。く。一と。あ。一と。れ。一と。初。一と。水。一と。ふ。一と。一と。う。一と。け。一と。を
 映。一と。し。一と。載。一と。く。一と。ん。一と。嵐。一と。山。一と。一と。是。一と。よ。一と。り。一と。の。一と。道。一と。一と。つ。一と。り。一と。あ。一と。る
 一と。ん。一と。言。一と。問。一と。ひ。一と。芳。一と。慰。一と。ふ。一と。の。一と。処。一と。へ。一と。母。一と。の。一と。後。一と。室。一と。立。一と。出。一と。く。

目今こころが憚るともけい。嵐の山へ出養生とせよと
神の旨告とわ。夫の有がとれたるぞく。抑彼山の名山よ
て。高くはまると低くは山の容笑ふがごとく。花と以て
白粉とく。松の翠と黛と。天然の粉黛まじく。山乃
けこかれ尋常みね。峯我天皇愛とせまひて。此は
皇居と立させまひ。桜の則此皇帝。大和の国よりの
山より。りつし植多しい。此花の吉野よあまのし。若ら
月へ須たしも。明石の山。立まると。べく夏にま。火太良
むけ。宇治の愧。紅葉の雪よ。四ツの時。換く。依物あ

最のころと。処ありと。そ斯かりと。ろと。処は。抱む。
娘が。ごころと。氣厨の症の。発散す。と。う。う。う。ひ。あ。急
假家と。造営て。養生よ。出いべ。然あ。が。此。ご。ろ。の。
飯も。す。ま。い。菜も。飲。日。く。や。せ。る。の。ま。お。ま。い。の。養。生。よ。出
し。が。ま。い。ま。い。の。間。見。合。せ。追。く。快。氣。よ。赴。ま。い。
尔。後。小。鬼。も。角。も。せん。娘。よ。甬。心。得。ま。い。飯。や。ま。い。り。れ
進。ま。い。も。つ。ま。い。食。べ。本。後。母。が。心。を。休。め。よ。と。
重。く。ふ。り。母。の。慈。悲。桜。子。の。ま。い。ま。い。何。と。應。ん
詞。も。あ。い。心。れ。う。ら。ま。手。と。合。せ。母。と。拜。ま。目。あ。い。あ。ま。

あまの彌増をうりて。侍女二人の同音の神の教よまり
し。後室よぬれ命も。まゝと神ごとと言ひべし。
斯よそのものも重あまの娘これ御病着も。遠りぬ中
御本後。まゝいべしと祝し。是より後の日よ
まゝ。桜子が病着も追くよ愈まつ。嵐山の假家
もまゝ。出来立られ侍女。胡蝶阿哥と相そへる。
二月の下旬。嵐山を移らせり。話不在下且説。典
膳が一子鹿の進。父が家督と相続して。自執権の
職を保ち。父よおしぬ悪逆不道。上と凌ぎ下と傷

ひ。猶も謀反に徒黨を企て。遠く旗上せんと
其準備頗あり。宇良上家の忠臣。庄左工門を
病死し。鎌田と押さつ。今の心ふりぬれ。大西が
後家操女と。秋月清英のままが。渠ホが心とひと
んとも。使し召しむ。彼二人の何変中んと。
おどろきあがり。出仕すれ。鹿之進の執権の職を
権威の上坐より。彼二人と見下し。今日足下達
兩人と。召よせしこと。餘の美より。豫てふく
あつる通。去年九月十日の夜。主人の愛妾古乃

鹿之進
兩人
心底
探る

探女



鹿之進

桂太夫



花女我父と殺害し。出奔して行衛しき也。そびく
 詮美する処。彼古乃花の桂川へ。入水せしもの世に風
 同いふふし。合点あり。定めて殿に御陣処へ。少げ
 こゝろと人とおのふちへ。使者と以て委細に光景。詳し
 言上す。とゞくとも。決して御存知あるを光景。とゞくとも
 自身の愛妾ふまを。匿しおろし。そのやと。潜る人し。く
 窺ひしむ。曾て左やうに景色あり。又本国へ奔り
 う。間喋者し。窺しむれど。そふもまね。谷子え。
 爾まども。早竟一婦人。何国や。でり。落のびんや。是の

定めく其方等。兩人中よありつらん。明く地よ白状せ
 よ。陳し。とて。知行の勿論。其皺服よ。拘るごと。思ひ
 がけ。疑ひ。清英の不審。是の執権に言。と
 覚へ。側室の事。先達。御せんを。あり。と。め。と。れ。
 言上。し。偽。り。お。く。真。以。て。ま。り。と。ぶ。ら。び。又。彼。人。乃
 桂川へ。入水。有。し。と。い。ふ。誰。ま。り。と。れ。も。あ。り。
 猶も。執念。孤疑。し。ま。い。徑。を。ふ。し。と。心。得。ね。ま。り。
 大西。と。い。一。昨。年。家。隸。が。喧。嘩。の。事。よ。つ。と。と。絶。交
 し。と。れ。が。彼。家。と。ど。の。ふ。計。ら。ん。や。う。い。ふ。と。と。と。

御賢慮やぐさされよと。言てもたてべりま清英家
 隸ホが喧嘩に因る。確執せしとい表むそのも内く
 中合せし先殿へ。志意と通り居るもの。撃扇
 外すも。我言辞ハ外るべく。雨すれがりの古乃
 花も。匿藏するにうとぐひふ。操よいつふと問く
 ま。操のあそり景色あふ。先かどよりおん命。一
 心を得たぐい。只今清英言ま。通り。則春在世乃
 時よりして不和ある彼人と。何とてかやうに謀計。
 言し合さん中ういふ。奴家よまを。おんうとぐひふけ

とせまよの恐きあぐ。いふ女よさわど音信不通
 るに。汝が娘桂太良と。密通してある。何ぞや。人知
 くとありふりまこと。天も地も我あると。三人ハ
 うふさまり。まご其上は壁は耳。石は口ある世とま
 ずや。知らんが橙と出れべきり。子供ホが縁まひりま。
 内く和睦して。上と欺る不道叶輩。兩人ともは吟味
 ののりま。何と心は徹か。飽やで邪智ある一言
 み。清英の慌忙しく。席と蹴立る去人とすれが。鹿之
 進声より立言。けとせ。秋月清英吃相く。何

国へ往や。但し心よ覚悟有て言つけあさき以處
とのぐれ。出奔せんと心あさうと。声うけられて振う
て。側室はるの先達て言いごとく毛頭去りぬ。不和
ある中と走りあがり。桜子と密通せし。桂太良が不
行跡勘當し。んが拍子ふられど。子供が縁と幸ひみ。
和睦せしと言きて。某が耻辱ふまばさぐり出
手討ふ。我潔白とんせやさんと。かく行状と
むしうんが夫の奴家も同トこと。一旦の武士の意地
まろ。交しと絶られども。今いふや和睦しとて。娘よ

ことと不美とせしと。世は人口ふりけりまてい。死より
良人へ立ぬ。奴家もともふと。褌引あげ。立んとま
とまこと疾視。こころの趣意ともいふ。立ささぐ
い不礼千万。今日兩人をよびよせし。汝ホが子ども
は不美。せんがせん為でいあり。吾がさぐねるの古乃花
が有家どりくやせやめくと。言きて二人の座は直
人いつとあさうのども。某よあさく側室の处在。曾めら
る存知やさび。言ひ辞よりさうりあさむ。弓矢神
は御討とけんと。刀ささうとめき離し。丁くと

心とささめ疾往と。焦焯ことばよ親いれ。あひひい千
れ胎のうら。えんね面よ忠と美と。そりつや一気の
撻とふく。打つまろくこそ退出り

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

花月奇譚卷之七終

